

「ChatGPT」は凄い？

対話型生成AIが生活の心の支えに急成長しており、「AIがないと不安」と答える人が43%もいるらしい。それだけAIが活用されていると言うことだ。ある統計によれば、日本の高校生の6割がAIを利用、このままではとりわけ「ChatGPT」が友人や教師の役割を担う時代が来るのではと警鐘している。

私はAIが広い社会で多様に活用されていると言うことは承知していたが、恥ずかしながら「ChatGPT」の何たるかを全く知りえなかつた。先日、とある会議の場で『ChatGPT』を通信制高校で活用できるのでは？」と言う趣旨の研修の場があつた。二回に分けての研修であったが、2回目のパソコンを実際に使っての研修で、「ChatGPT」が私たちのあらゆる質問に答え、論文を要約し、ビジネス戦略を提案してくれる様は、まさに人間の知能を凌駕したかのように見え驚愕したものだ。とりあえず少しほんの程度にはならなければと焦った想いである。

そこで、不登校生徒を抱える保護者がその問題を「ChatGPT」に投げかけたらどのような回答と指南が返ってくるのか確かめたり、友人に使用方法を聞きログインしてプロンプト(AIへの指示文)を送ってみた。「わが子は高校2年生の不登校、その期間は半年以上、食欲などは戻ってきて普通の生活になりつつあるが、終日、ゲーム三昧で学校の話などをするとキレて手が付けられない」等の内容にした。回答はなんと10秒ほどで返ってきた。その回答は要約すれば、「(1)回復期に入りつつあるが、外とのつながりには強いストレス、(2)学校の話は封印すること、(3)ゲームを否定しない、(4)親がまず安心できる存在になる、(5)学校以外の居場所を作る、(6)親がストレスを抱えないために支援機関などに通う。」であった。回答は極めて正確で的を得ていた。相談した保護者がこの回答にさらにプロンプトを送ったら、さらなる的確な回答が届くのだろうと思う。

しかし、現場で不登校相談を受けている私にとっては、失礼だがなんだか定年退職した校長が自治体での不登校相談支援をしている際の助言と変わらぬ印象を持った。私は保護者の涙を見て、嘆きを聞いて、愚痴と不安を受け止めながら、保護者の同意を得ながら今日からできる保護者の言動を指南している。その「生」の響きはない。これが「ChatGPT」の体験の死角かも知れない。ただ、興味は尽きない。使いこなす練習のために、次は念願の豊翔高等学院の校歌の歌詞をプロンプトしてみたい。

(丹羽 豊)